

2017 年度「研究者の横顔」 市村 崇先生

1. 研究者になろうとしたきっかけ

「がん」と診断されたとき、「がん」の治療に向き合う事以外に様々な問題が生じます。がん研究会有明病院（以下当院）では、がん患者さんの子供たちの心のサポートのために多職種が集まり、「がん研有明病院チャイルドライフサポート(GCLS)研究会」を発足させました。当初は、医師は私一人、看護師 5 名の合計 6 名でしたが、現在は、チャイルド・ライフ・スペシャリスト (CLS)、ソーシャルワーカー (SW)、臨床心理士、緩和ケア科医師、各科医師他、多くのメンバーが集まり 60 名弱の研究会となりました。日常臨床の中で、がん患者の子供の心理的・社会的支援を試行錯誤しながら行っています。しかしながら、我々の活動の有効性の評価をする必要があると考え、前向きな介入研究を行うことにしました。今回の研究は GCSL 研究会としては、初めての試験となりますので、研究者としては第一歩となります。

2. 助成研究の内容紹介

本研究は、以下の二つの柱からなります。①チャイルドサポートチーム（院内多職種）が当院に入院している 18 歳未満の子供を持つがん患者さんを介して、がん患者さんおよびその子供の心理的・社会的支援を行います。そして、その有効性について、介入前と、介入後の定点におけるスコア調査を行います。②がん患者さんの子供が生活している地域の行政・教育・医療機関と相互的・即応的なオンライン情報共有システムを構築し、実用化を目指します。

3. 2 の将来に繋がる結果予想

これまでがん患者の子供に対する心理的・社会的支援システム（院内多職種からなるチームの介入と院外包括的支援システム）の報告はありません。がんの専門病院での研究となりますが、院内多職種チームによる介入の有効性が示されれば、がんの専門病院以外へも応用可能と考えられます。本研究の結果から、当院のような多職種からなる子供に対するサポートチームの設置が広まれば、患者と子供の心の負担・日常生活の負担が軽減されることが予想されます。また、今後、医療機関内だけでなく、医療機関外（行政・教育）との包括的支援システムを構築することにより、がん患者の子供に対する相互的・即応的支援を行う事を目標としていきます。

4. 全国の RFLJ 関係者に一言

GCLS 研究会はがん患者の子供の心のケア・社会的サポートの必要性を感じていたメンバーが集まって発足しました。私が、がん患者の子供の心のケアの必要性を痛感したのは以下の経験からでした。10 年以上前の事になります。告知したがん患者の配偶者が、

その日の夜に自殺してしまいました。残された子供が、親族からの心無い母親の病状告知で、打ちのめされてしまい茫然自失となりました。その自殺した配偶者がうつ病を患っていたという事実が後日判明しました。

我々はがんの専門病院に所属する専門家集団です。がんの診断・治療など、がんそのものに対する専門性・関心は非常に高いのは当たり前ですが、がんの周囲の発生する様々な問題こそがんの専門病院である本院が率先して介入していくべきと考えております。

GCLS 研究会は多職種から構成される柔軟性のある研究会です。これからも様々な問題に取り組んでいきたいと考えております。